

教育研究三十年

大田 堯教授 最終講義

昭和52年2月18日

Thirty Years of Educational Research

The Final Lecture of Professor Takashi OHTA

1

こんなに大勢の方がおいでくださいます、それだけで感動しています。私は156番という教室でずっと教育学概論を長くやって参りましたので、その156で最終講義をやりたかったというのが私の念願でしたが、お葉書のちょうだい具合では収まり切れないということから、このようなところに、ご案内するということになったわけです。私はここ10年ばかり講義をして参りました平常の服装で、ここに入りまして、最後の講義としてみなさまに何か申しあげたいと思っているわけです。

私は今、東大の教師として約29年でございますが、学生時代を入れますと、実に39年に及ぶわけです。その東大からいま自由になろうとしております。実は、先程、堀尾さんのご紹介もありましたように、正確には昨年12月3日に都留文科大学という山の中の大学で、これから新しい仕事をやろうと考えておるのでありまして、その時にすでに東大を去ったということになります。

また私は、1969年のころ、1月から2月頃、つまり大学紛争の一番激烈な頃、大学に警官を導入したということを含む事後処理の責任を痛感いたしました、この大学を去る決意をかたくして、私の女房にもそのことを話しまして、心の準備もしてもらおうというようなことしたのであります。

けれども、それを聞き伝えて、多くの方から、何とか思い留るようというご忠告を受けました。最後の決め手といたしましては、すでにガンのために病床にありました勝田先生が長い手紙をくださいました。その長い手紙の終りの部分というのは、体力が弱って筆がかすれてくるという状態ですけれども、結論からいいますと、東

大の教育学部のためだなどとけちなことをいわないが、ともかく、いまは東大に踏み止まってくれといわれ、また、それに再び君が身を決する時が必ずくるにちがいないという予言めいたことも書かれておりました。あるいは、勝田先生の書かれた長い手紙の最後のものかもしれないのですけれども、おわりの方は筆の乱れを感じずのような書簡を受け取りました。それは、私の踏み止まりの大きなきっかけになりまして、おめおめと今日まで東大に生き長らえるということになったわけでございます。定年を待たずして、明らかに、私自身の選択によって、この東大を去ったことは、まず、せめてもの慰みとするものにすぎません。

私は東京大学というものに対して、一方においては誇りをもっておりますが、より深く、より高い次元におきましては、東京大学にあることの負い目というもの、私をある意味でおさえつけてきという感じもするわけでございます。いうまでもなく考えは複雑でございます。今申しあげたような単純なものではございません。今日、これを最後に東京大学の講義を終るにあたりまして、私が教育研究に従事いたしました、30年、40年というものをふり返りまして、若干の感想をみなさま方にお伝えすることによってお別れの言葉に代えたいと思うわけであります。

2

文字の読める人でありますならば、大抵の方がお読みになっておられるジャンバルジャンの物語でございますね。ジャンバルジャンの暗い過去というものと戦いがありますけれども、考えてみますと、ジャンバルジャンほどの暗い過去ではないにしても、私共には人生の暗

い過去を持っている存在であると思います。それもひとつやふたつの影ではありませんね。たくさんの影を背負って私共は生きています。そういう吾々の背負っているたくさんの影と格闘しながら、同時に、現在というものと格闘しながら、吾々自身も未来をつくっていく、私自身をつくっていくそういうものであろうかと思えます。

30年の教育研究というものをふり返って、教育研究というひとつの面に関して私のその影からお話をすることを始めたいと思えます。

私が教育学研究を始めようと考えましたのは、高等学校の学生の時であります。その動機は考えてみれば至極単純素朴であったと思うわけですが、教育によって野蛮な人間が少なくなる限り、世の中はよくなる、そういう程度の考えでもって、教育研究というものに関心をもち始めたということでもあります。勿論、これは極めて単純化したいい方でございまして、このような考え方で矛盾するような人間観や世界観というものが、当時すでに私の中に同時にあったということも恐らく否定できないはずで、人間というもの、自分一個の中に、カント的傾向ももっておれば、あるいは、マルクスのな面ももっている。あるいは、サルトルももっているというふうに、いろいろな可能性を人間はもっておりまして、そういうものの中のある時期において、ひとつの支配的な自分というものをやはりそれぞれの段階でもつものでありましょう。

それにしても、私のさきほど申しましたような意味における教育への関心というものは、非常にしぶといものでありまして、なかなかこれを乗り越えることがむずかしゅうございました。今から考えてみますと、こういう教育への関心は全く赤面するような、自分一人だけが野蛮の除外者であって、その除外者たる自分が、多くの人間を教化するような思いあがった心に充ち充ちていたわけでございますから、この教育に対する関心というものは、いわば偏見に充ちたものであったと思うのであります。

高等学校の時に『ペスタロッチー教育学』という長田新先生の書物をひもときました。そして「直観」というものについてのむずかしい説明をいっしょうけんめい読んで、解ったつもりで、校長の添野信という先生でありましたが、禅の大家といわれていた方でありまして、先生のところに、むずかしい論議を持ち込んだりしたものであります。添野先生は、その時いとも気軽に、直観というのは、これがみかんだというふうに生のみかんを見せて教えるのが直観なんだというふうにいわれました。

そうか、そんなものなのかと思ったのですが、それならば、そんなむずかしい解説をする必要はないはずだがと、その時思ったけれども、添野校長に対して反論することができずに終わりました。

今から考えると、実に幼稚な考えでした。事物というものに直接に対面、対決して、そして己の世界を拓くというのが直観の意味だと思うのです。事物というものとぎりぎりに対決するなかで、自己の主体を確立していくという直観の姿勢というものが、「野蛮を化する」というような教育観のなかからはでてくる余地もなかったということでもあります。つまり私をとらえた野蛮を化するだけでも一言にいえるような思いあがった教育観は、教育概論のなかでもる々話しましたように、東洋的な重い伝統を背後にもつ教化思想とかかわりがあったというふうに思うのであります。

このような教育に対する関心というものは、戦争を境に私の中からなくなってしまったかということとんでもないこととございました。この素朴な、そして、恥しい考え方というものが依然として、私の教育観のなかに長く居坐る、いわば過去の暗い影でございます。

戦争、そのことについて、いろいろ申しあげることがございますけれども、これは省略をいたします。戦後、私はこの大学に帰って参りまして、その前後から広島県の地域に入りこみまして、これは、私の今の郷里であります。本郷町という町に入りました。地域教育計画を始めるのであります。いうまでもなくこの地域教育計画は民主主義ということを経て前にいたしまして、民衆の自発による教育の計画というものを試するというそういう実験でございました。確かに民主主義的な、民衆自身の参加による教育計画という建て前になっておるのですけれども、そして、そういう側面もふまえていたとは思っておりますけれども、今から考えますというと、民衆自身の本当に持っている切実な問題、切実なエネルギーというものを組織していくような、そういう発想の教育計画であるよりも、すでに用意された、いわゆる「民主的」といわれる教育の構想を地域に押しつけるというような結果に終わったというふうに、今では反省されるのであります。

本郷教育計画の失敗というのは——この失敗というのが常に教訓でございますが——この失敗を経まして、私は民衆がおかれている社会構造、社会基底というものをうんと勉強しなければならないということを痛感いたしました。当時私は文学部の地下室に研究室を与えられておったのですが、その文学部の地下室に社会基底研究会という研究会をもちました。そこで、社会科学の勉強を

みんなを始めました。その当時学生であった諸君も見えているかもしれませんが、その諸君といっしょに社会科学の「いろは」から勉強を始め、そして教育学というものを社会科学的に再編成するんだという大きな構えをもちながら、社会科学関係の本を読み合っていく。単に読み合うだけではなくて、地域に出かけて行って、地域の日本の民衆がどのような社会構造のなかで、生活というものを遂げているのかということについての多くの勉強をしました。そのひとつひとつは実に貴重なものであったのでありまして、見るもの聞くもの全て新しく、今までの教育学が対象とすることのなかったような生々しい農民の生活、漁民の生活というようなものに触れながらの勉強であったのでございますから、それは、私にとっても、一緒に勉強してくれました当時の学生諸君にとっても非常に勉強になったのは事実であったと思うのであります。

にも拘らず、そこに登場して参ります民衆というものは、血の通った民衆ではありませんで、いわば眺められている民衆、上から眺められている封建性・前近代性をもった民衆、そういうものであったのではなかろうかと今考えると反省されるのでありまして、この時点でもなお、「野蛮を化するんだ」という観念からは脱け出ることができなかったのであります。

その頃私と一緒に勉強した学生諸君には大変まちがった姿勢を教え込んだということになりまして、恐縮ですけれども、まちがいはまちがいに、いっしょに模索したというあの探究的活力というものは、きっと、何か問題として残ったにちがいないと、むしのいい話ですが私は思うのであります。若げのあやまちというものが、せめて反面教師としてであっても、当時の学生諸君の内面の火を燃やすということになってくれたならばよかったがなあ、今では思うのであります。

私の心の中にあります、教化思想と申しますか、「野蛮を化する」とする教育に対する考え方が動揺してくるのは、大体、1950年頃、朝鮮戦争を境にした時期以後ではないかと考えています。この段階になりまして、私は国家というものが、治める者と治められる者から成り立っていることを実感をもって捉えることができたように思いました。国家というものが治める者と治められる者からできているということは、これは「いろは」でありそんなことも知らないのかといわれるかも知れないのですけれども、実は、まだ、その段階における私の国家観というものはどうも一枚岩であったのではなかったか、理屈としては、権力と被治者民衆があることは知ってはおりましてけれども、身体でそういうものかというふう

に受け止めるようになるのには、どうも1950年以降の状況のなかではなかったかと思うのです。

この治める者と治められる者、民衆と権力というものの分別というものが、実感を込めて、理解されたということは、世界的な規模での問題でありました。東と西との対立という激しい体制の斗いというものがそこにかみ込んでおりますと同時に、日本の国内における労働者・農民というような人たちの働くものとしての自覚というものと、それに対する権力の政策というものが、明らかになってくるというわけでありまして、1950年を境として、その矛盾というものが私の内面に実感を伴って展開したのだらうと思うのであります。そして治める者と、治められる者というカテゴリーからいうと、私の教育観はどうも、治める者の立場を脱け出していなかったのではないか、治者の立ち場を脱け出ることができなかったのではないか、逆にいえば、民衆の立場、治められる立場に立つ教育というものにたどりついていなかったのではなかったかと反省されるのであります。この反省に達しますのは、先ほど申しましたような国外、国内でのイデオロギー、異なる体制の衝突といったことから直線的におこってきたのではなく、それまでに、私自身が直面し、体験してきた数々のできごとを通してであります。

千葉県漁村で、漁民の方から受けた強い印象はわたくしの忘れ得ない思い出の一つで、この思い出については、他のところでも話して参りました。その漁師さんが子どもの時に学校の先生が黒板に書かれた「顔」という漢字を「ツラ」と読んで、その読み違いを叱られた恨み、30年前の恨みを一気に晴らすつもりで、私に話してくれたというようなことがありました。あるいは、三重県的女子労働者が小学校時代を並べた親友である大学文学部の女子学生を、何年ぶりに尋ねて行って、こまごまとお互の生活を話し合おうとしたのに、いざ向きあってみると話がなかなか通じにくかったという話、その淡々とした表現のなかに、教育をすればする程人と人が分裂させられるという学校教育の体質というものを痛感させられたというような出来事なども頭に浮かんで参ります。あるいは、昭和20年代の終りに、吉和事件という同和教育の問題が広島県に発生いたしました。四民平等の精神を欠いた江戸時代の歴史というものを正確に伝えようと努力したのだけれども、教師が、その教室の中に未開放部落出身の子どもがいるということに気づかなかったために、かえって、その時代の身分差別についての教師の話が、大きな抑圧として、その子どもにのしかかるという事実を知りました。ただ正しい学問上のことを伝えるだけが教師の仕事ではない、それを受けとめる

子どもの内面への影響をちゃんとつかんでいなくては教育にならないということも教えられました。

また、在日朝鮮人の権力に対する実に激しい斗いというものが、朝鮮戦争を境にして、私たちの前に展開いたしました。私も勝田さんも、朝鮮人部落を訪れました。私の訪れた朝鮮人部落のうち、岡山県の水島というのが一番印象が強うございました。鉄条網に囲まれ、高い望楼をもった部落でありました。警官がドブコクか何かをおさえるというようなことを名目に攻めてくるというような考えで、望楼を構えて、見張りをしているのです。夜、水島の駅に降り、私は、朝鮮人の方々に囲まれておりました。「吾々は防衛のために参りました。」といっ、私を囲んでしまいました。そして、防衛をされて部落の鉄条網を越えますという、「ここは解放地区です」と告げられ、「大丈夫です」といわれ、その望楼があり鉄条網がある部落で一晩を過しました。翌日は学校を見ました。朝鮮人の子どもたちを収容した学校でございまして、それを日本の当局が全面的に管理を強行しているのです。朝鮮人はこれに反対しておりまして、学校のガラスというガラスは子ども達によって全部割られているという荒涼たる教室でありまして、抵抗の跡が生々しく、残っておりまして。翌日大阪に参りまして、朝鮮人自身が管理・経営し、そこでは、すべて朝鮮語で教え、朝鮮語で朝鮮の歴史を学んでいるという学級に行ってみました時、目を見張りました。本当に活力に充ちた授業というものが展開されていたのです。もう、まるで掌を返したような教育の相というものがまざまざと、私の目の前に展開されているのであります。

つまり、治められる者の立場からの教育というのは、今述べましたように、いくつかの例を挙げましたが他にもその他の様々の例を経験するうちに、やっとのことで教化の思想を少しずつ脱け出すということになるのであります。まあ、人間というものは、青年期までに刻印された経験を克服することはほんとにむずかしいもの、なかなか変らないものでありまして、そういう経験を重ねていくうちに、私は治められる者の立場からの教育・人権としての教育というものへの感覚に少しずつ目覚めてきたと思うのであります。

いずれにいたしましても、民衆が登場して参りました。今まで、静かにしてきました民衆が1950年以後の反動政治のなかでこそ、逆に勢力を得て、いろいろな発言をし出しました。様々の生活記録もできますし、ラジオの街頭録音などを通しての発言もありました。こういうことは日本の民衆の歴史になかったことでありまして、そういう大きな民衆登場、いわばうねりのなかで、私は

生活綴方と出会いました。

民衆登場という背景のなかで、子ども達と出会うという私の教育観にとっての目の覚めるようなひとつの体験というものが成立をみるのであります。生活綴方については、数多くのことを語ってきましたので、これ以上申しあげる必要はないと思うのでございます。

無着成恭さんの『やまびこ学校』もそうですが、今日来てくださっている渡辺春正先生らを始めとした教師集団が、恵那の谷間で生活綴方の実践をやっておりまして、民衆の声を背景とした子ども達の声を教育実践の中心にすえこんできました。何といひますか、学校の教育の場面の中へのワンパク登場であります。ほんとに久しぶりの人間味ゆたかな子どもたち、ワンパク登場でありました。

つまり長い戦時下の学校のなかでは、“良い子”がなくなり出され、ワンパク性、子どもらしい価値が認められなかった。それが生活綴方などの再登場によりまして、復活してくるのでありまして、それが私の教育観の転換の決定打というふうに考えることができるのであります。

3

あまり詳しく申しあげるような時間はございませんので、歴史を少し進めるようにいたします。やがて、1955年、昭和30年頃を境にしていわゆる経済成長期に入ってくるのであります。そうして60年代は人的能力政策の時代であります。学力テストであるとか、高校の多様化などというような当面の経済政策の実現のために教育を利用しようというような傾向が色濃く現われてきました。

戦前、戦中のような、いわば価値観を押しつける、慈悲的におしつけるウェットなど申しますか、教化思想というものは、後退はしましたけれども、それに替って極めてドライな人間を利用するだけ利用してやろう。人間の能力は、もうとことんまで利用してやろう、極力人間能力のウェイストをなくしていこうというような教育観・経済合理主義の線にのった教育観が、勇ましく登場してきたのであります。この人達の立場からすれば身体障害者といえども、貴重な“人的資源”でありました。だから、片手を一本失っている身体障害者であっても、その片手を使って、生産性に協力させる、そういう能力を利用すれば生産力がどれ程上るかというような観点に立った経済政策、経済合理主義、人間の可能性の収奪がかなり露骨に展開されるという時代が参りました。

人間にはいろいろな面があることはいうまでもござい

ません。人間という動物は理性もありますし、感情もありますし、また言語ももっておりますし、社会的な存在でもあるというわけで、そういう特徴が云われてきました。しかし、この人間の諸特質の中で、とくにホモ・ファール、工作的人間とでもいうべき部分だけを抽出いたしまして、その部分を極力国益と経済の繁栄のために利用しようという傾斜をもった思想でありました。しかし事実上、経済の発展というものは、これは或る種の必然性をもって展開するものでございます。科学技術の進歩、その科学技術の成果をもって生産を高めていくということはひとつの必然の途であることはまちがいないのであります。けれども、生活綴方のような勉強をして参りました私どもにとりましては、どうしてもこれに対して異和感がありました。ですからこれにすぐのっかるというふうなわけには勿論いかなかったのであります。

ここで、ちょっと生活綴方のことを申しあげますけれども、生活綴方というものは、私は、何と申しますか、人間の疎外克服ということで、日本人の発見しました一つの方法論ということができるとは思いませんか。疎外状態というものを直視し、自分の存在理由を問い正していく、自己直視とさらに自己をとりまく状態を直視するという、そしてそのみとったことを集団のなかで、確かめていくというような人間疎外克服の方法論であろうと思えます。日本では、疎外論に通じた学者、アカデミーの哲学者達が、何故生活綴方というものを哲学上の重大問題として取りあげないのか、その代りにどこか外国の疎外論を問題にするというのがいささか不思議でございます。

生活綴方にはそういう人間を人間に立ちなおらせるモメント、抑圧のさなかで自分を発見していく方法論が確実に含まれていると思うのであります。この方法論のなかには、外側から押し寄せてくる力というものを、逆に利用して、自分のものにする、柔軟に受け入れておいて、ひっくりかえず、外からくる強烈なものを一旦は受け入れておいて、それをひっくりかえずという誠にしぶとい方法論が含まれているということを私は今でも信じており、この方法論というものは、やはりどんな時代になりましても、その根本においては貫いていくような、人間の立ちなおりのひとつの理論と方法であると思っております。

この1955年後に展開してくる社会状況、技術革新と大衆化、情報化社会の中にあっては、生活綴方だけによる人間回復というものではどうも間に合わないということ

もたしかだろうと思っています。科学というものが、ある一部のものに奪い取られ、その強大な科学と文明が人間をふりまわしてしまうという状況のなかでは、何ども河原に石を積んで、それが水に流されるというにも似た無力感におそわれざるを得ないわけでありました。でありますから、生活綴方の内包している人間の立てなおし、人権としての教育の思想を保持しながら、科学と文明とを積極的にわが物とすることが必要なのではないかと判断をするようになります。支配者、権力者の立場から与えられる科学技術というもののかわりに、私達のコントロールできる、人間がコントロールできる、あるいはそれを学ぶことによって逆に人間が太っていくようなそういう科学や学問は何なのか、というきびしい問いをつきつけられたというふうに考えるのであります。

科学的真理というものは単なる実用ではないはずだ。なる程、人間の作ったあらゆる文化のなかで、近代科学ほど実用的なものはない。一つの科学的発見は、歴史や風土の境界をこえてたちまちにして、地球全体に利用されるという強力な実用性をもっているのは事実でございます。しかしながら、科学の本質というものは、その実用性にあるよりも、それを通して真理を学び、自ら自由になる、「真理がわれらを自由にする」という考え方が、科学と人間とを結びつける本来のなきずなであり、それ以外にあり得ないのではないかとこのように確信をしながら、この経済成長期における教育課程論を展開していかなければならなかったのであります。

1960年代の半ばかと思いますが、ゼミで福沢の『学問のすすめ』をとり上げまして、この一冊の『学問のすすめ』のために2年間が使われたほどであります。しかし、その基本は、「物理」と「人権」の問題であります。『学問のすすめ』は科学と人権との結合という問題をテーマとしているのでありまして、啓蒙期における日本人の力量を一瞬結晶させたようなもので、それが福沢の知恵をとおして表現されていると思うのであります。ゼミがそういうテーマをとりあげましたのも、さきほど述べましたような時代を背景としていたのだと思います。だが基本問題は何と申しても人間の問題であることは言うまでもありません。

1970年になって、ここにも付属の先生がいらっしやっているかもしれませんが、付属学校で私はイリンの『人間の歴史』という本を使いまして、中学2年生の諸君と人間についての勉強をやった経験があります。これにつきましても、私には実に印象深い様々なことがございますが、今日、それを繰り返す余裕はございません。生徒たちの質問からも人間というものの存在について実に多

くのことから教えられました。「先生、人間は何で、2本足で立って歩くようになったのか」という生徒の問いに答えるためにいろいろ調べてみたのですが、どの文献にもそういうことが、あまりはっきりと書かれていないんですね。そこでけっきょく私なりの結論を出したのですが、それをきっかけの一つとして、人間の目的意識性「そのきになったから立ったのだ」という問題を、さきほどからお話ししてきた問題状況、社会状況の中で切実に考えさせられたりもしたのであります。このことは、これまで話したり書いたりしたことですので、これ以上お話しませんが、当時の私の問題意識はそんな具合であったのであります。

実際、実用的、能率的人間というものに傾斜した教育観というものがあり、当時は支配をしておりました。これは例のひとつとして、お話ししたいと思います。その頃私は九州の教育科学研究会で近藤原理さんという精神障害児をあずかっておられます先生と同宿いたしました。夜遅くまで子どもと教育について語り合ったのであります。近藤益雄先生の息子さんであります。その時に近藤先生がこういうことを申しました。「自分があずかっている子どもが一日も早くいろいろな所作を身につけて、そういう動作を教え込んでいくということが非常に教師というものには気になる。この前の週に母親が来た時には、箸を使えなかったけれども、3週間もしたあとでは箸を使えるようになったですよと知らせたい。その子は雑巾も使えるようになりました。便所にも1人で行けるようになりました。これができるようになった。あれもできるようになったということをお母さんに見せたいという強い誘惑におそわれます」ということを告白されました。

ところが、あれをやらせよう、これをやらせようと思っているそのうちに、子どもの眼の色が段々悪くなる。つまり、あれができるようになり、これもできるようになったけれども、どうも無理にやらされている。つまりそのために生きが悪くなる。人間の生きという問題は、教育においてはむしろ基本の問題であります。実用は必要ではあるけれども、人間の生きを取り戻すということがこの時代における私どもの抵抗の基本原則であったのであります。

「できる子ども」をつくるという関心は、今日でも非常に強うございます。そういうもののなかで、何が人間を人間らしくするのかというような問題は、これからも益々考えていかななくてはならない点ではなかろうかと思うのであります。

実はこの高度経済成長期のさ中、むしろいまからいう

と末期ということになります。先ほどちょっと申しあげましたが、いわゆる東大紛争というものがもちあがって参ります。これはまだまだ歴史として、捉えていくには、せつないほどの問題でございますから、これを距離をおいて、ここで述べることは大変つらい思いがいたします。いわゆる東大紛争は煎じつめれば、学生の権利という問題であろうかと思うのですが、この学生の権利という問題は、もうすでに子どもの権利という問題、生活綴方の時点においては、すでに私自身のなかにちゃんと視野のなかに取って置かなければならない問題でありました。にも拘らず、私自身の足元のなかにこの紛争を通じて、初めて、学生の権利という問題が実感をもって登場してくるということを考えてみますというと、教化思想というもの、本当にしぶといやつだと思っております。本当に根っこが深いのであります。

私の内と外にはそういう思想、相手を何かに化するというようなベクトルをもった教育の思想というものが、非常に強く宿っていたということが、東大紛争のなかでの「教育的処分の反省」という問題のなかには込められていたことであります。私自身のこの紛争のなかでの努力というものは、治安優先の政策というものをできるだけとらせないようにすること、そうではなくて、できるだけ、教育的な観点というものを貫徹するというふうに努力しなければならないと考えたのです。

私達の執行部に対して、あるいは、私自身が後に執行部に参加するものですから、その執行部の内部におきまして、そのような筋に沿った主張を繰り返したいたしました。万策尽きたとでもいいますか、あのような警察力導入の処置を了承しなければならなかったということは、私の心のなかに、今尚深い傷を残しているわけでありませぬ。

私はその頃、学生諸君に対して、繰り返しいましたことは、運動というものは、民衆と歴史とから離れてはならない。民衆と離れたところで運動をすることはおかしい。又、先輩の斗ってきた斗争の歴史に自分達の歴史をつなげなければならない。民衆の歴史というものにつなげて開かれてあるという、そういう方向への斗争が組めないものであろうかということをおは、学生諸君に繰り返した記憶がございます。教育学部のなかには、ご承知のように民主青年同盟を中心にした大きなひとつの学生諸君の分野が存在しまして、全国から、その支援の学生諸君が、充ち充ちているという状況のなかで、私は学部長という仕事をやらなければなりません。私は、そういうなかでの私共の教育学部にいる少数意見者、マイノリティというものをきりすててはならない。何とし

てもこのマイノリティを守らなければならない、圧倒的な力のなかであっても理性的な連帯という精神に立った教育学部が守られるべきであると、学部長として考えていたのであります。

しかしながら、この“紛争”は残念ながら、問題の提起に終わりました。それは、私共にその根本的問題提起を受け止める力量がなかったということが第1でありますけれども、同時に学生諸君の間の分裂によりまして、みじめな結果に終わったのであります。それは問題を取り残したのでありますから、その問題が存在する限り、いずれは解決されなければならないものであることには変わりはありません。

歴史と民衆とのなかに、運動をより深く捉えるというのは、その“紛争”にかかわるだけの問題ではなく、私の教育研究の問題でありましたから、紛争の前後からではありますけれども、特に紛争後、教育というものを民衆の習俗のなかにもぐり込んで捉えるといういかに一層の熱意を注ぎたいという気持ちになりました。

私は大学では、柳田国男のゼミを粉争まえから、そしてその後の今日まで持ち続けたのも、そういう発想がそこにあるのでございます。これは学生諸君にもよく申しましたように、決して、柳田国男研究ではなかったのであります。そうではなくて、柳田先生などの研究された遺産というものに学びながら、民衆がその子を人にしていく、民衆自らの子どもを人間らしい人間にいくために実に豊かな困苦に充ちた遺産というものを吾々が研究することであったのです。

教育が人間という種の持続というところから考えなくてはならないという確信をもつようになったのであります。もっともこの考えに達するまでに、その最初の動機というものは、むしろ、少し違ったことであつたかもしれません。それは、むしろ戦争に対する危機感というものが、私には強かったのでございました。核兵器の存在というものが、一しゅんにして多くの生命を奪い取るということを含んだ戦争は、全く教育というものの敵対物である。教育の前提を打ち壊すものであるとの考えでした。その考えは勿論今日でも変わるものではありません。教育というものは平和のための教育でなければなりません。それで教育は何よりも、種の持続という問題とつながっていることが根本前提であります。しかし、先ほどから申しましたように、経済成長に伴ってあらわれてまいります教育の退廃現象というのを見ておきますと、実は、戦争はもう始まっているのではないかというのが私の実感なのであります。子育てと教育をめぐっては、戦争は開始されている、もう戦争の最中にあるのだ

という実感が私の心のなかにだんだん拡がってくるようになりました。

一方では教育の計画化組織化は実に目覚ましく展開していることはご承知のとおりでございます。吾が国の人口の3分の1近くが、実にフルタイムで教育制度のなかに入っているのであります。それほどに社会に対して非常に大きな影響力をもっているもの、一大社会組織ともなっているのであります。そうなればなるほど、教育はいろんなエゴイズムの食いものになっているという感じがいたします。国家権力のエゴイズムに支配されるということは、もとよりのこと、経済的要請による大企業のエゴイズムも、さらに私たち教師自身のエゴイズムもあると思うし、今日は、それがほとんど、無統制な状態のなかにおちいつているのではないかというふうに思えてならないのであります。

それは柳田さんなどの資料をもとにしながら、また、自分自身でも柳田さんがやっただやうに村々を歩いて、人々に出会い、おじいさん、おばあさん、若者達、子ども達に会いながら、学べば学ぶほど、その感を深くするのであります。特に私は、産業革命以前の、いわば共同体で生きていた時代の非常に年期の入ったていねいな子育て、ていねいな民衆の子育てというものを知れば知るほど、産業革命以後の教育というものは、実に何とというかアナーキーな状況におかれている、あるいは、国家統制を中心とした教育外的勢力の支配のもとにおかれているような気持ちがしてならないのであります。

私たちは産業革命以後、共同体の崩壊の中で多くのものを失ったと思うのであります。同時に、多くのことを獲得したことも認めます。しかしながら、失った大事なもののなかの一番大事なものというのは、子どもを育て、教育をする人間関係が失われたことではなからうかというふうに思うのであります。そういう失われたものを今から取り戻そうということは夢です。どんなにていねいな濃密なる子育ての習俗をかつての農民や共同体がもっていたとしましても、またそれが共感に価するものであるといたしましても、それをもう一度私どものものにするなどということは、全く幻想です。ですけれどもこのようなアナーキーな教育の状況のなかから、子育てと教育をこそ目的とした独自の人間連帯、人間関係を創造していくことが、切実に要望されるのであります。子育てと教育の戦争状況というふうないい方を申しあげましたのは、そういう無秩序をいったのでございまして、そういう無秩序のなかでも、多くの優れた教師たちの努力、また地域によりましては、新しい子育ての秩序を生み出す父母の努力が行われております。そういう実態の

中の可能性というものは、追究しつづけなければならないものであります。また昔の共同体の中の子育ての秩序が含んでいる価値というものの重要性に着目をして、これからも、学ばなければならないと思っているわけでございます。

私は、このような子どもを育てることと教育とをめぐる新しい人間関係の創造は、それが引金となって文明の体質を改めるものと思っているのであります。子育てと世なおしということをご数年申しあげてきた筋の背景には、今のような考えがあることを申しあげるのであります。

4

あまりまとまりのないことに終わったのではありますが、あと、研究方法というようなものをちょっとふり返ってみたいと思っているのであります。

最初に申しあげましたように、教育をめぐる出発点からの偏見というものにはありました。その出発点からの偏見、いわゆる影ではありますが、過去の影におびえながら、しかしながら、まがりなりにも、私なりに、ここ30年の間、教育とは何かという問題を問いつけてきたことができると思うのであります。また私の求めた教育が保障されるような社会というものを追いかけていきたいというふうに思うのであります。

しかしながら、これは、何と云っても仲間といっしょに運動を進めるなかでわかりあっていったのだという方がより正確だし、勝田さんなどの学問もそういう中でつくられたというふうに思っているのであります。人々はあの人の教育学は、どういう著名な学者の系統に属するものかなどということをご今でもなお重視する傾向がないわけではありません。私もマルクスだとか、デュイダとか、柳田だとか、実にいろいろの人の本も読み、影響も受けたのですが、いってみればつまみ食いともいった方がいいかも知れません。そういうものよりも、むしろ私自身の現実との格闘、仲間達といっしょに直面するさまざまな状況ととりくむことにひとつの生きがいを見出して努力してきたということ、そういう現実の状況との格闘のなかから、学んでいったという要素がいちばん中心にあったのではなかったかと思うのであります。

私自身は堀尾さんのご紹介にもありましたように、教科研運動というものを、ここ20数年続けて参りましたけれども、私は、私の学生に対して、教科研に入れとは一度も言わなかったと思います。教師の立場で、そういうことをいうのを禁欲し続けたと思います。しかしながら、

私は、私自身の研究というものは、勝田さんを含めて、そういう仲間たちと一緒に現実と格闘する中で、実に多くのことを学んだということをお願いのであります。

私はこれも堀尾さんのご紹介にありましたように、ヨーロッパなどからも多くを学びました。現在もイギリスの学者たちとのつきあいがございますけれども、その人達から貴重な情報は数多く教えられてはいますが、特に大きな影響を受けたとか、その人達の考えにとくに感動したというほどのこともございませぬ。まあ、イギリスについていえば、パートランド・ラッセルとか、ハーバート・リードであるとかいう人々の書いた、国際的な立場で書いたものの方には多くを教えられ引きつけられたのであります。けれども、そのほかにも産業革命以後のイギリスの民衆が努力した教育、子育てというものは、私は学びたいと思うのであります。私は第1回の留学以来イギリスの農村に入り、漁村に入り、労働者のところに住むようにしましたし、その後もしばしばイギリスを訪問しましたがけれども、実はイギリスが産業革命という歴史的出来事を経て、どう自分を守ってきたか、その守りようから、できるだけ、がめつく学んでやれという意欲はもっているつもりであります。私は学問というものが、著名な学者や、あるいは学説からのつまみ食いでよいというようなことをいっているわけではもうとうありません。むしろ、私が、もしそうであったとすれば、それは私の弱点にはかならないのであります。むしろ卒業論文や修士論文の中でも私が目をつけたのは、引用が的確であるとか、つまり、もとにした文献のなかの本筋というようなものをつかんでいるかというようなことは、ひとつの着眼点として、見てきたような気がするのであります。しかし私が言おうとしているのは、その文献や人物からのつまみ食いというものもいけないけれども、もっといけないのは現実というものからのつまみ食いということでありませぬ。私どものまわりにあります教育現実というもの、そういうものをつまみ食いをして満足してはならないということでありませぬ。もっといえば、いくら本をたくさん読んで、現実というもののつまみぐいしか出来ないというのでは、ほんとうの学問にならぬのではないかと云うのであります。

目の色の変え、体を張ってぶつかっていく、そういうような教育現実との格闘というものを多くの仲間ととりくむ、そういうものから、私共は、自分自身の理論というものと方法というものを生み出していくことがいいのではないかと云うような仮定に立って、私たちの勉強は行われたように思うのであります。実際、ものに触れ、足で歩いて、あるいは現実を汲み取っていくとい

うことが、ここ30年の勉強のなかの非常に重い部分を占めるというふうに思います。片方に読んだ本をのせ、片方で自らの足で歩き、人間に聞き正してきたことということとを秤にかけるならば、自分の身体で歩いた方が、ぐっと重いに違いないと思うのであります。

恵那の先生方とは30年間のつき合いをしてまいりました。困ったら恵那に入りました、考えている問題を確かめに行きました。30数回、私は恵那の谷間に行くと記憶しております。

サークルの先生方にもお世話になりました。毎月2回位を限度とする私のまわりにいらっしゃる現場の先生たちに、私のあやふやなことは確かめました。翌日大事な講演か何かしなければならぬ、そういうふうなことがある毎に、私の考えを先生方の現場の実感から批判を受けました。実に多くの事を学ぶことができたように思うのであります。

社会調査もずい分やりました。恐らく数えきれませんが、数10回に及んだのではないかと思います。北は北海道網走から、南は沖縄の宮古の村々に至るまで、私はおばあさんを訪ね、若者を訪ね、子どもを訪ね、教師を訪ねました。そういうなかで、私は非常に多くのことを日本の民衆から学んだのであります。調べるという調査であります。調べることは、人間関係をつくることだというふうに考えました。調べる者が調べられるものの立場に立つということをしつこく考えながら聞くということ、そして、別れる時にはひとつの連帯ができるということ、そういう状況でない限り、相手から本音を聞くことができない。本音を聞くことができなければ、調査の目的は、特に教育調査の目的は、実に不充分だというほかはないのであります。

私はベーコンが「主観を禁欲して、自然を拷問にかける」と言ったあの近代科学の精神は、あくまで正しいと思いますし、これを否定することはできないのであります。しかし、これを人間に適用する場合に、私は色々の準備が必要であるというふうに考えています。今日行われている人間に対する調査というものは、冷たい調査のように私には思われてなりません。そのもつ問題性というものは、静かに検討されなければならないと思うのであります。調査研究に当って、主観に流れるということは、ベーコンと共に許されないことでもあります。しかしながら、目的意識性と申しますか、調査される相手の目的意識性というものが、調査者に共感できないなら、いや相手の目的意識性を理解できる研究力というものをもたない限り、人間の意識を客観的に捉えるということではできないのであります。人間が目的意識的な存在である

限り、それを調べるといふばあい、相手のそれとのかかわりでとらえないかぎり客観的とは言えないのではないかと思います。

大部終りに近づきました。教育に対する偏見のなかで始まった私の教育研究ですが、今の私は、教育研究というものに対しては、ますます、やりがいを感じるようになっていっています。人間の発達ということ、教育という観点から現代文明を捉えなおしていくということの意味は、実に重く、広く、やりがいがあります。私は、今後ともその取り組みをねばり強く続けたいと考えています。私は先ほどまで申し上げましたような過程のなかで少し触れましたが、教師としまして、その時の私の偏見というものを、学生諸君に押しつけたと告白をいたしません。教育は確かにこわいものであります。でも人間は、偏見をもつ存在であるといっぺん居直る必要もあろうかと思えます。自分は偏見に充ち充ちているという観点に立ちながら、その偏見を乗り切っていくために、学生諸君とともに共同の探求を努力するということが、結局は、教育なのではないかと私は思っています。

終りになりますが、私が東大を去るに当たって、東大というものについて、あるいは東大の教育学部というものについて、もっとこういうことをしたかった、できたらあとの諸君が、そういうことろ頭に入れておいてもらいたいということをしぼりまして、三つほど申し上げたいと思います。

その第1は、貪しい者、障害をもっている者、社会的に不平等な処遇におかれている者、そして、働きながら学ぼうとしている者に、東大は、大胆に道を開いてほしいという、そういう注文がございます。それには、いろいろな方法があると思えます。私の在任中に、教師として定時制高校に勤めながら同時に大学院の学生であることが許されないという規定により、大学院の博士課程に進むことの出来なかったケースがありました。それはここにおられる小川君のことです。

私はこうした規程の存在を残念に思いました。まだ小川君の場合はいい方で、といえば、小川君はおこるでしょうか。そんなことはないでしょう。もっともっと貪しい人、障害のある人達に東大の門戸が少しでも開かれるということ。そういうことを希望するのであります。

更にアジア、アフリカのいわゆる発展途上国にある若者に道を拓くということもあります。東大百年祭に百億の金を集めるなら、その全部を今、私が申しましたようなことの工夫のために使ってほしいというのが、私のいつわらざる念願なのであります。

第2番目にこれは研究についての問題であります、

私は東大に人間の心身発達の施設、研究施設をつくりたいという念願を長らくもっておりました。人間の発達研究施設、つまり人間の精神と身体が発達の筋道から、あるいは、その筋道を研究し、これが人間能力の開花に役立つような諸条件というものを明らかにしていく。こういうものを望んだのであります。特に付属学校というような施設を使いまして、遅れた子ども達、障害をもった子ども達をこそ、そこに来てもらって、そういう子ども達に力をつけるには、どうしたらよいのかという実践を中心にしても、心身諸科学の密接な協力による心身発達研究所、研究施設というものが、教育学研究のいわば基礎、基礎研究の場として存在してほしいという念願をもち、教授会でもその主張をし続けてきたつもりであります。私が負いめをもちつづけてきた東大、その負いめの一側面をもつぐなうということにもなるのであります。私はこれはいい思いつきだと思っておりますが如何で

しょうか、ご検討をお願いしたいと思います。

第3にアジア、アフリカ研究の弱さということを感じて参りました。特に東洋教育史、東洋社会の研究、歴史的研究が重要と思います。それで東洋教育史というようなものについて、他のアジアの諸国の状態を視野におきながら、そうした講座をもち、そうした研究に志すということが検討されてほしいという気持ちをもつものであります。

私は、これで終りたいと思うのでありますが、ここにおられる城戸幡太郎先生をはじめとする私の恩師、ここにおられない恩師、先輩、それから教育学部の教職員のみなさん、若い教育研究同僚のみなさん、用務員さん、事務局のみなさん、あるいはそういう方々と同時に非常に重要な私の教育に協力してくださいました学生諸君のみなさん、すべての方々に心から感謝を申しあげましてお別れのことばといたします。 さようなら